

吉井源太と明治

《33》

全国に教師を派遣

新潟へ製紙教師として派遣した久松儀平が急死した後、高知での葬儀が済んだ明治二十五（一八九二）年十一月十七日、吉井源太は、新潟での世話人だった山口権三郎に次のような手紙を送った。

儀平の死に際して各種の手配をもらったこと、儀平の息子の林之助を雇用してもらえなことへのお礼を述べている。

久松儀平死去の節は、御厚情、実に御礼の申し上げ様もございません。このことを親族一同深く感謝いたしております。また林之助の件につきましては、儀平の後役として御雇い下さり、これまた本人の希望の通りと存じます。若輩につき、なお一層御引立をこう

むりなく、お願い申し上げます。林之助の給料につきましては、御取り決めをよろしくお願い申し上げます。

久松林之助は翌年四月まで新潟で製紙教師として働き、四月十四日に新潟から帰ってきた。この時、山口権三郎より「越乃雪」進物ありと日記に書かれている。これは越後長岡の銘菓だ。源太は久松家へ呼ばれて、林之助慰労の酒宴にいらなかった。

この山口権三郎という人は、新潟県柏崎から東へ十五キロほど入った、刈羽郡横沢村（現・長岡市小国町横沢）の大地主の家に生まれ、県議会議員や議長を務める一方、産業近代化の必要性を感じて、日本石油や

新潟鉄工といった会社の創設にかかわった人だ。小国和紙の産地でもあり、その改良を考えて高知から教師を招へいたのだった。

その結果、この産地では同二十六（一八九三）年のアメリカ・シカゴ万国博覧会に紙を出品し、賞をもらうことができたということだ。

林之助が帰郷した四カ月の八月に福島県から高知県へ教師派遣の依頼が来る。源太が林之助を推薦し、了承された。九月に二人で高知県庁へ行き、福島県行きの打ち合わせをしている。源太は福島県へこのような内容の手紙を出した。

先般より依頼の製紙教師につきまして、高知県庁ともご相談いたしました結果、久松林之助というものを差し上げます。お話しただきますようお願いいたします。本人は若輩者ではありますがありますが、改良の製造方法に充分熟練いたしております。組合委員皆様のお引き立てをお願いいたします。

このあとも各地からの製紙教師派遣の依頼は数多くあったようだ。教師が各地へ出てしまい、現在は一人もおりませんという返事を出すこともあった。林之助の新潟派遣のころに一カ月二十円だった「教師料」（給料）は十年後の明治三十七（一九〇四）年には次のようになっていた。上等七十円▽中等五十円▽下等三十円。

この教師の等級は、改良紙製造方法の技術レベルによるものではない。ものを書く力や、説明・談話の力の差によるということだ。

この間の和紙の価格上昇率は二倍弱で、儀平や林之助ら力量のある教師は重用されたことが分かる。

（京大大学院研修員、京都府在住）



吉井が進物に受け取った菓子「越乃雪」は現在も親しまれている